

# 『枕草子』初段と和漢の類書の首巻部類標題の関係についての覚書

中島 和歌子

## 1.はじめに

『李嶠百廿詠』『芸文類聚』『初学記』などの類聚編纂物七種と『和漢朗詠集』及び『分類語彙表』(国立国語研究所編, フロッピー版, 平成6)の共通する漢字の語彙を典籍ごとに比較したところ, 「分類用概念語彙に使用される語句は, 少ないものでもその四分の一が, 多いものではその半数が現代日本でも使用されていること」, 「一致する語彙は, 自然景物・年中行事・人事関係の語彙に集中している……など」がわかったという報告がある[注1]。

『枕草子』もまた一種の類聚編纂物である。「オントロジ」(知識概念木)や「部類標題」(分類概念語彙)の語は使用されていなくとも, 分類意識や類纂という視点での研究は既に行われている。類聚的章段と和歌文学との比較研究, あるいは諸本間の比較研究がその中心といえようが, 本稿ではまず初段を取り上げ, 上野理氏の論[注2]を中心に先行研究の紹介・再検討を行い, 諸氏が個々に指摘されてきたことの融合をめざしたい。その中で, 「部類標題語彙の継承性」と『枕草子』の関わり的一端も, 明らかになるものと思われる。

## 2.初段その他の注目すべき本文

初段やその他の本稿と関わる本文を先に掲げておく。イ等の記号は時節以降で用いる。

イ春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは。すこしあかりて, 紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ, 螢のおほく飛びちがひたる。また, ただ一つ二つなど, ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに, 鳥のねどころへ行くとて, 三つ四つ, 二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが, いと小さく見ゆるは, いとをかし。日入り果てて, 風の音, 虫の音など, はた言ふべきにあらず。冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにあらず, 霜のいと白きも, またさらでもいと寒きに, 火などいそぎおこして, 炭持てわたるも, いとつきづきし。昼になりて, ぬるくゆるびもていけば, 火桶の火も, 白き灰がちになりてわろし。(1段, 小学館『新編日本古典文学全集』)

口花の木ならぬは(中略)をりにつけても, 一ふしあはれともをかしとも聞きおきつるものは, 草, 木, 鳥, 虫もおろかにこそおぼえぬ。(38段)

ハおほかた, これは世の中にをかしき事, 人のめでたしなど思ふべき, なほ選び出でて, 歌なども, 木, 草, 鳥, 虫をも言ひ出したらばこそ, 「思ふよりはわろし。心見えなり」とそしられめ, ただ心一つにおのづから思ふ事をたはぶれに書きつけたれば, (跋文)

二人の, 物のよしあし言ひたるは, 心のほどこそおしはからるれ。ただ人に見えそむるのみぞ, 草木の花よりはじめて虫にいたるまで, ねたきわざなる。何事もただわが心につきておぼゆる事を, 人の語る歌物語, 世のありさま, 雨, 風, 霜, 雪の上をも言ひたるに, をかしう興ある事もありなむ。(能因本長跋, 小学館『日本古典文学全集』)

以下は, 233段から237段の全文である。能因本でも, 同じ順番に並んでいる(226段から230段)。初段と共通あるいは類似する表現に下線を付した。

ホ降るものは 雪。霰はにくけれど, 白き雪のまじりて降るをかし。雪は, 檜皮茸, いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。また, いとおほうも降らぬが, 瓦の目ごとに入りて, 黒うまろに見えたる, いとをかし。時

雨、霰は板屋。霜も板屋、庭。

へ日は 入日。入り果てぬる山の端に、光なほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。

ト月は 有明の、東の山ぎはにほそくて出づるほど、いとあはれなり。

千星は すばる。彦星。夕づつ。よばひ星すこしをかし。尾だになからましかば、まいて。

り雲は 白き。紫。黒きもをかし。風吹くをりの雨雲。明けはなるほどの黒き雲の、やうやう消えて、しろうなり行くも、いとをかし。「朝にさる雲」とかや、文にも作りたなる。月のいと明かき面に薄き雲、あはれなり。

### 3.上野理氏「枕草子初段の構想と類書の構造」(『国文学研究』昭和48. 6)

本節では上野氏の標記の論文(全5節)を紹介し、次節において私見を述べて再検討を行いたい。次の二箇所が要旨に当たると思われる。以下、Aをより詳しく紹介し、Bは次節で再度取り上げる。なお、もとの改行箇所は続けて引用し、下線を付かせていただいた。

A自分の特殊な発見をかいて自己をかたろうとする作者の意図は、初段のそここにうかがわれた。彼女のこの欲望はあるときもった「天」をかこうとする構想を「天部」に拡大させ、さらに<類聚段>の序章へとますます拡大させたが、この欲望を規制し、方向づけたのは類書の構造であった。(3節)

B『和歌初学抄』が「枕草子」の方法を採用して「物名」の部をかいたとは考えられない。両者の酷似は、両者が同書の類書の影響を受けたことを想像させる。それはおそらく歌語をあつめた「歌枕」や「髓脳」の書であろう。『枕草子』の初段はこうした類書を中継に『修文殿御覧』や『芸文類聚』等の中国の類書の体系にしたがって構想され、執筆されたようだ。(5節)

上野氏はまず、「類書や辞書は『雨・風・霜・雪』のまえにつねに『日・月・星・雲』をおく」として、『万葉集』巻七「雑歌」、『新撰字鏡』、『千載佳句』、『倭名抄』第一「天部第一」、『古今六帖』第一、『江吏部集』上、『能因歌枕』、『本朝無題詩』、『綺語抄』「天象部」、『類聚古集』巻第五「天部」、『類聚古集』巻第十六(東歌)「乾象部」、『和歌童蒙抄』「天部」、といった諸書の各巻頭の部類標題を掲げ、さらに『秘府略』『楊氏漢語抄』『弁色立成』『東宮切韻』『葦華抄』も同様であったと推測し、これらに影響を与えた中国類書の『芸文類聚』『初学記』『白氏六帖事類集』の各巻頭部類標題を引く。そして、岸上慎二氏の初段「再編成」説(『中世文学 I』昭和38)に拠りながら、次のように述べられる。

「日は」「月は」「星は」「雲は」の章段が存在する以上、『枕草子』もふつうの分類方法を採用したと考えてよいのではないか。(中略)しかし、「日・月・星・雲・雨・風・霜・雪……」で類書の冒頭部分がすべてそろったわけではない。「日」のまえにある「天」がない。「天」を欠く類書もないわけではないが、やはりみようだ。(中略)初段の「春は曙」は、「天は」に該当する面をもっている。「天は」をかこうとしたから、「就中偏好是春天」の詩句を自然におもいだし、「春曙」の美をかくこともできたのだ[注3]。(中略)自分の発見をかきたい作者は、「天は、春天。夏天。秋天」と品名を列挙するだけでは満足できない。その美しさを描写するが、「冬天」はかきにくかったであろう。(中略)「冬はつとめて」で作者は空をみることをやめ、地上の霜雪をいうが、「長跋」と共通する「雨・風・霜・雪」は空中にみたものではない。初段の主題を「天」に限定すると、これをすべて逸脱する。「天」は「天空」ではなく、「天象」に拡大して理解する必要がある。「天」に重点をおきながら、日月雲雨風霜雪という類書の冒頭部分をしめる「天部」の重要事項が初段に集中的にあらわれるのは、けて偶然ではあるまい。相当量の<類聚段>を執筆し、その「再編成」を必要としたとき、『枕草子』における「天部」関連章段の冒頭をかざる序章として企画されたものではないか。

また氏は、「類書によってさまざまである「火」や「灰」の部類方法を調べ、『初学記』第二十五巻「器物上」、『倭名抄』巻第十二「燈火部第十九」、『和歌童蒙抄』第六「漁獵部」及び「資用部」は、『天部』『歳時部』に遠く、『木・

草・鳥・虫』にも直接関連はないので『枕草子』とは無縁とし、『芸文類聚』第八十巻「火部」と第八十一巻「葉香部・草部上」、『江吏部集』中巻末「火部」と下巻はじめの「木部」「草部」「鳥部」の連続に注目しつつ、最終的に、『白氏六帖』巻第一の第二十から第二十五「霜 露 霧 氷 火 灰」、『新撰字鏡』の五部から八部「雨 風 火 連火」、『古今六帖』第一帖「天」の中の「霜 雪 霰 氷 火 煙」、『類聚古集』巻第四「天部」末の「霜 煙」及び巻第十二「寄物述別思」中の「日 月 露 火 雲雀」という配列に最も注目して、次のように述べられる。

これらの書によると、「火」や「灰」は「天部」に属し、「雨・風・霜・雪」に連続する。(中略)「火」や「灰」は地上の「霜・雪」とともに「天部」に所属したものであった。「天」や「天部」を重視した作者は「火」を構想に加え、これに言及するのはきわめて自然である。

「天部」に続いて「歳時部」に関しては、

「歳時部」はどの類書にもある重要なものだが、初段は「天部」のなかに「歳時」をもち、二段は「歳時」に終始している。またわが国の類書に影響を与え、部類の基本になったとおもわれる『芸文類聚』や『初学記』は、春夏秋冬を「歳時上」、節日を「歳時中」や「歳時下」に部類している。二段の歳時は巻頭にふさわしくない。

と述べ、初段の構想については、次のような変更があったとされる。

彼女は強い関心をもっている「雨・風・霜・雪」や「火」を初段にもりこみたいと思う。類書の体系を重視すれば、「春・夏・秋・冬」や「曙・朝・昼・夕・宵・夜」の事項もすべて充填したい。この二つの欲求を満足させるために、作者は「霜」「雪」「火」と同時に「冬」「朝」「昼」をとり、主題を「天部」からいっきよに「歳時部」をふくんだ章段の序章へと拡大させたようだ。

さらに、初段には「天部」「歳時部」に属さぬ素材として「蛩」「鳥」「雁」「虫」があることを指摘した上で、『鳥部』『虫部』は『木部』『草部』とともに類書の終末部をしめることに注目される。そして、「字書」の『新撰字鏡』『東宮切韻』『季綱切韻』『色葉字類抄』や「詩書」の『千載佳句』『本朝無題詩』のように「木・草・鳥・虫」を巻末に置かないものもあるが、『初学記』『白氏六帖事類集』『倭名抄』『古今六帖』や『江吏部集』巻下、『綺語抄』下は置き、『芸文類聚』『和歌童蒙抄』もそれに準ずることを具体的に示して、

作者は初段に「歳時部」の春夏秋冬を加えたとき、「天部」の序章から<類聚段>の序章へと構想を拡大させたのではないか。こうしたおりに彼女の心にはすぐに「木・草・鳥・虫」が想起されるようだが、そのなかから「鳥・虫」をとくに選抜し、「雨・風・霜・雪」と「鳥・虫」で<自然物を代表した>のではないか。

と述べられる。前掲ロ・ハ・ニの文脈からも、「雨風霜雪」と「木草鳥虫」について、「前者が<貴重なるもの>、後者が<軽微なるもの>を代表した」という同様の指摘がある。

#### 4.上野氏説の補足・修正案

上野氏の推定された初段の構想の変遷を再度たどると、類書冒頭に当たる「天(天空)は」の執筆を企図→主題「天」は首巻の「天象」「天部」全体に拡大(霜・雪・火等)→「歳時部」の要素(春・夏・秋・冬等)を追加→更に類書末尾の「木草鳥虫」を加えて自然物全体を表現した、ということになる(=前節A)。順序については想像する他はないが、初段の要素と類書の構造との対応の指摘は、その通りだといえよう。しかし、疑問点もある。

①初段には上野氏が取り上げられた以外の要素も描かれている。そのうち地上の「山」は「自然物」に含めることができようが、「火桶」という人工の「器物」や、明記されていないが「炭持てわたる」人についてはどのように説明すべきか？ また初段は、「～は」型の「自然物」類聚章段以外の章段にとっては「序章」ではないのか？

②「清少納言の座右の類書は国書であり、和文の歌枕に類したもの」(=前節B)といえるのだろうか？ 『和歌初学抄』編者が『枕草子』を参照した可能性は無いのか？

③上野氏は、「清少納言の分類学がふつうの類書のように『天部』ではじまったか、勅撰集等の歌集のように四季の『歳時部』を冒頭におくか、推測するのは困難だが、初段が『天部』と『歳時部』の両部をもち、『天部』を重視していることから推測して『天部』をさきとし、『天・日・月・星・雲・雨・風・霜・雪・春・夏・秋・冬……』の順序であったと考えておく」とも記されているが、そもそもそのどちらかに限定する必要があるのだろうか。「初段が類書の『天部』と『歳時部』の重要事項を素材にしていること」、前節波線部のように冒頭に両方があること自体が重要なのではないか？

以下、順に諸氏の論を参照しつつ、検討を加えていく。

#### 4.1. 天地人と木草鳥虫あるいは森羅万象

①の疑問には、日向一雅氏の「枕草子の聖代観の方法——『陰陽の變理』の観念を媒介にして——」（『国語と国文学』平成5. 9）[注4]の中に答えが見出せる。

氏はまず、岸上慎二氏の「『春は曙』の『紫だちたる雲』についての覚え書き」（『リポート笠間』昭和53. 9、『枕草子研究 続』昭和58）を踏まえ、「紫だちたる雲」は「聖代にあらわれるという『紫雲』を意味する」とし、『延喜式』巻二十一「瑞祥」中の「慶雲」、『芸文類聚』巻九十八「祥瑞部上」の「慶雲」中の「紫雲」、『類聚国史』巻百六十五「祥瑞部上」の「雲」中の「紫雲」（文徳・清和・陽成）、『続日本紀』の神護景雲の改元の詔以下称徳・淳和・仁明朝の「慶雲」の記事、『源氏物語』藤裏葉巻の「紫の雲に」の歌を根拠として掲げられる。

次に、上野氏と同じく初段が「天象」と「歳時」に関する言葉で占められていることを指摘し、「この段は天地自然の調和と四季の理想的な運行を典型化して描いていると見られる」、「そのような四季の描き方が古今集の四季の部立を先蹤としていたことは間違いあるまい」と述べ、さらに『源氏物語』初音巻の冒頭の『岷江入楚』の解釈を援用して、初段や3段では「天地人の三才」、「『天地人』の調和に満ちた泰平の世界」が語られているとし、初段の聖代観に「実体を与えるものとして中宮定子を中心にした知的で華やかな後宮の様子を描く日記的章段があったのではないだろうか」と結論されている。初段はやはり、日記的章段群の「序章」でもあるのだ。

なお日向氏は、「冬の『火などいそぎおこして』という個所を除くと、『人』の世界は意図的に排除されているように見えるが」とも、また「三段になると年中行事を軸として人々の様子が描かれ、初段の『天』『地』だけの世界に、『人』の世界が加わり」ともいわれ、初段には「人」がほとんど無いことを強調されるが、わずかでも有ることのほうに注目しておきたい。初段には、天地人の調和、一年（四季、2段は月）そして一日の順調な時のめぐり、それぞれに相応しい天地の自然の美、その中で「つきづきしい人の営みが描かれている。「光り」と「闇」、「をかし」と「あはれ」、さらには「わろし」といえるものすべて、森羅万象が凝縮されているのである。

高橋亨氏もまた、「歳時と類聚——平安朝かな文芸の詩学にむけて——」（『国語と国文学』平成11. 10）[注5]の中で、日向氏と同様の指摘をされている。

高橋氏は、作り物語における歳時の表現として、『竹取物語』の「おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす」等を指摘し、『宇津保物語』については、年中行事に加えて、次の仲忠の女一宮への言葉に注目される（室城秀之氏校注『うつほ物語』による、傍線箇所は移した）。なお清少納言の仲忠最貞は知られている（79段、82段、210段）。

『宇津保物語』「楼の上」上巻

春は、霞、ほのかなる鶯の声、花の匂ひを思ひやり、夏の始め、深き夜のほととぎすの聲、暁の空の気色、林の中を思ひやり、秋の時雨、夜明らかなる月、思ひ思ひの虫の聲、風の音、色々の紅葉の枝を別る折の気色を思ひ、冬の空、定めなき雲、鳥・獣の気色、朝の雪の庭を眺め、高き山の頂を思ひやり、凍みたる池の水をあはれび、深き心・高き思ひも、もろもろのことを思ひ合はせ、世の中の、すべて、千種にありと見ゆる物の、おぼゆる物、また時に従ひつつ、色衰へ、久しくなり、また、むなしくなりぬる物を心に思ひ続けて、琴の音に弾き添へむと、思ひ同じくて弾き侍ればこそ、琴の音、思ひ思ひに従ひて響き、よろづの折には合ひ侍れ。

氏は、これについて「俊蔭」巻の表現にも言及された上で、次のように述べられている。

基底となる素材は『古今六帖』の歌題などと多く一致し、巡環する四季の風物と同化する表現において『古今集』的であり、『枕草子』とも類似したところがある。歳時に関する『枕草子』の記述は、「春は、あけぼの」という初段から、「ころは、正月、三月、四月、五月、七、八、九月、十一・二月、すべて、をりにつけつつ、ひととせながら、をかし」へと展開している。年中行事を節目とする自然と人事との交流は、自由な情景描写に流れて中断しているが、四月以降も含めて、その世界は『枕草子』の全体に散りばめられていた。(中略)宇宙や世界の森羅万象を言語化し秩序化して支配しようとする文字権力の王権幻想は、まさしく唐土の文化に由来し、その文化圏の東端に位置していたのが漢字文化圏としての律令国家日本であった。もちろん、それは類聚意識の規範であって、個別の歌や物語はそこから逸脱すべく揺れ動いている。

氏の論の中心は、この「逸脱」あるいは「もどき」「異化」のほうにあり、「楼の上」の秘琴伝授が、「勅撰集としての『古今集』のような王権と貴族社会の調和の幻想と共通しつつも、琴の音楽の超現実性において対峙するものであった」と述べられているが、ここでは日向氏の指摘と重なることに注目しておきたい。『古今集』の政教主義的な四季(歳時)観が、初段をはじめとする『枕草子』の表現の前提となっているのである。

また、前掲の仲忠の言葉は、「内侍のかみ」の巻の仁寿殿での〈節会定め〉における正頼の五月の節会絶賛と併せて、高橋氏のご指摘どおり、確かに『枕草子』に類似している。波線部なども鍾子期の言葉と共に「香炉峯」の段が想起される。しかし本稿では、類似も認めた上で、「春は曙」を『枕草子』が自覚的に最初に置いたことを重視したいのである。

以上三氏は、お互いに無関係に論じられている。日向氏は『芸文類聚』の「慶雲」(次項に掲げたようにこれが終末部にある点にも留意しておきたい)に言及され、高橋氏は「古今集の類書的性格」を指摘し、『白氏六帖』と『古今六帖』との関係を述べた平井卓郎氏説を引かれてはいるが、類書の構造や分類方法にはふれられていない。そもそも『古今集』を含めた王権的時空観は類書と同じ世界認識に基づいており、改めて言及する必要は無いとされたのかもしれない。しかし、初段の天象と歳時や、「鳥」「虫」の意義を考えるのには、類書の各内容(例えば雁は侯鳥で鳥は孝鳥)だけでなく、上野氏が行われたような構造全体との比較も必要である。類書の最初と最後を取り込んでいることがわかってこそ、森羅万象(前述したように天象・季節・動植物といった自然だけでなく、自然の中に含まれる<地>や、<人>も)を表現していることが一層の明らかになるのである。

なお、三氏とも特に言及されていないが、『礼記』『月令』も、『古今集』を論じる場合と同様に、初段や2段に限らず『枕草子』との関係を重視すべきであろう。

また、これらの論と他の初段論、例えば萩谷朴氏による「わろし」の「反転屈折の叙法」を含めた構文の分析(『枕草子解環 一』昭和56)や、初段の表現は「花」「時鳥」「月」「紅葉」などの風物をぬいて直接季節と時刻とを結びつける一方で伝統的な「雪」も挙げて「読者の固定的な美意識に対する痛烈なる挑発」を行っているという藤本宗利氏の論(「空白への視点」『むらさき』昭和59. 7, 『枕草子研究』平成14)は、両立しうるのである。

## 4.2. 「初段の構想を規定したのは……歌語の類書である『歌枕』や『髓脳』説再検討

### 4.2.1 和名抄は遠くとも『古今六帖』は近い

池田亀鑑氏は夙に、「枕草子は学問的には類聚抄・芸術的には六帖の感化を受けて、特殊な分類法を用いたのではないか」(『美論としての枕草子』『国語と国文学』昭和5. 10)といわれ、『古今六帖』の歌題と『枕草子』の各類聚的章段との影響関係についての研究も、諸氏により行われてきた。しかし上野氏は少なくとも「座右の類書」とは見られない。その根拠、つまり『枕草子』と両書の違いとされている点をまとめると、次のようになる。

a『和名抄』第一「天部」の中に「天」も「火」も無い。

b『和名抄』第一は「天部」「地部」「水部」「歳時部」の順で、「歳時部」が後方にある。

c『古今六帖』は「天部」の前に「歳時部」がある。

d『和名抄』は「雨風雪霜」,『古今六帖』は「風雨霜雪」の順で「天部」にある。

e『和名抄』は「鳥虫草木」,『古今六帖』は「草虫木鳥」の順で各部が並んでいる。

これらのうちdは、能因本長跋の「雨風雪霜」(2節二)との違いを指摘したもので、上野氏は「『長跋』執筆時の彼女の関心のありかた云々」といわれるが、清少納言の表現か否かは疑わしく、また氏が指摘されたように「他に例をみない、めずらしい配列」であるという点からも、目安とはできないだろう。またaとcは、前節の疑問③にも掲げた「初段執筆時の清少納言の分類学は『天・日・月・星・雲・雨・風・霜・雪・火・春・夏・秋・冬……木・草・鳥・虫』であったようだ」という上野氏の推定が前提となっているので、重視できない。むしろcの『古今六帖』の特徴は、「『枕草子』とはことなる」のではなく、近いというべきであろう(次項②で再度取り上げる)。

しかし、bとeは看過できない。『枕草子』が参照したのが両書だけではないことは確かである。特に『和名抄』は、2点とも『枕草子』との距離を感じさせる。うちeについて、動植物の二分類のみに注目して、改めて見ておきたい。以下、各書の末尾を示し、「部」の語、「上中下」や数字、巻数などは省いた。\*印は上野氏の論文に無い書である。部立の順でなく、本文を掲げたものがあるが、「」で括って区別した。

#### 【植物・動物】

『芸文類聚』火 薬香 草 宝玉 百穀 布帛 果 木 鳥 獸 鱗介 虫豸 祥瑞 災異

『初学記』器物 宝器 花草附 果木 獸 鳥 鱗介 虫附

\*『扶桑集』器用 梵門 樹 花 草 鳥 獸 虫 魚

『江吏部集』火 木 草 鳥

『三宝絵詞』序「木草(きくさ)、山川、鳥獸(とりけだもの)、魚虫(うおむし)」

『枕草子』跋文「木草(きくさ)、鳥虫(とりむし)」,38段「草木(くさき)、鳥虫」

『童蒙抄』服饒 資用 仏神 草 木 鳥 獸 魚貝 虫 雑体 歌病 歌合判

\*『文鳳抄』宝貨 服用 儀食 乘御 草樹 鳥獸 魚虫 方角 光彩 略韻その他

#### 【動物・植物】

\*『論語』陽貨篇「鳥獸(ちょうじゅう)、草木(そうもく)」

『白氏六帖』鳥獸 草木雑果

『和名抄』船 車 牛馬 宝貨…調度 器皿 飲食 稻穀 果廩 菜蔬 羽族 毛群 鱗介 虫豸  
草木

\*『十卷本』調度 羽族 毛獸 牛馬 龍魚 魚貝 虫豸 稻穀 菜蔬 果廩 草木

『綺語抄』動物(鳥 虫 貝 獸) 植物(草 木 竹 葛)

#### 【動物・植物・動物】

\*『事類賦』飲食 禽 獸 草木 果 鱗介 虫

#### 【植物・動物・植物・動物】

『古今六帖』草 虫 木 鳥

#### 【植物・動物・植物】

\*『枕草子』35段「木の花は」…38段「花の木ならぬは」39段「鳥は」40段「あてなるもの」41段「虫は」…64段「草は」65段「草の花は」

\*『能因本』44段「木の花は」…47段「木は」48段「鳥は」49段「あてなるもの」50段「虫は」…67段「草は」…70段「草の花は」

確かに【植物・動物】型が主流である。巻末ではないが、『新撰字鏡』、『千載佳句』下「草木部 禽獸部」,『本朝無題詩』巻二「植物 動物」に加えて、『李嶠百廿詠』「芳草部 嘉樹部 靈禽部 祥獸部」,『和漢朗詠集』下「松 竹 草 鶴 猿」,『八雲御抄』第三枝葉部「草 木 鳥 獸 虫 魚」,『藻塩草』巻八から巻十三「草部 木部 鳥類 獸部 虫部 三魚部」も同様であるが、【動物・植物】が「きわめて個性的」というほどではない。

一方『古今六帖』は確かに「個性的」である。「草に虫、木には鳥」ということなのであろうか。しかし『枕草子』自体も、少なくとも現存する章段配列では「木鳥虫草」となっており、むしろ『古今六帖』に近い。【植物・動物】型のみが「清少納言の座右の類書」とはいいきれないし、この点をもってしても、『古今六帖』との関係はむしろ強まるのである。

#### 4.2.2 時間帯重視は歌枕ではなく『千載佳句』にはじまり「春は曙」が推進したか

さて次に上野氏が、「清少納言の座右の類書は国書であり、和文の歌枕に類したもの」と推測された点を、再検討したい。氏は『初学抄』『物名』の名詞の配列順が、

(1)天 (2)日 (3)月 (4)星 (5)雲 (6)風 (7)雨 (8)霧(9)霜 (10)雪 (11)樹雪落 (12)時 (13)春 (14)夏 (15)暁 (16)朝 (17)朝夕 (18)晩 (19)地 (20)山 (21)峯……(94)～(104)(木) (108)～(127)(草) (128)～(140)鳥 (141)～(144)虫 (145)～(148)獣 (149)氷 (150)水 (151)火 (152)一月……(164)(総数からみても恐らく(163)の間違い、中島注)十二月

と、『枕草子』に酷似する」ことに注目される。確かに、以下の指摘はもつともであり、さらに、「火」に月名が続くのも、『枕草子』の初段と2段の関係を想起させる。

- ・「天」から始まり、天部に当たる語群の後に歳時部に当たる「春 夏」がある。
- ・歳時部には、さらに「暁 朝 朝夕 晩」がある。
- ・「山」までのほとんど名詞が共通する。無関係な語は「星」「霧」「樹雪落」のみ。
- ・「木草鳥虫」の順であり、しかも終末部の近くにある。
- ・月名の部分を除くと、「火」で終わるといえる。

両書の直接的な影響関係も考えられるところであるが、「内容面での影響関係はない」などの理由から、『和歌初学抄』が『枕草子』の方法を採用して『物名』の部をかいとは考えられない。両者の酷似は、両者が同書の類書の影響を受けたことを想像させる」という。そして、それが「歌枕」であるのは、『綺語抄』上も「天象部」に続いて「時節部」があり、四季関連語に続けて「けさのあさけ」以下時間帯に関連する歌語をあげることから、「『暁・朝・昼・夕・宵・夜』を『歳時部』に所属するのは『綺語抄』と『和歌初学抄』のみ、和歌に関する類書にかざられると考えてよからう」ということからなのである。

しかし、『本朝書籍目録』に見える『枕草子注』を書いた藤原季経は、『初学抄』の編者清輔(1104～1177)の異母弟であり、清輔自身が『枕草子』を読んだ跡もあるという(久保田淳氏「枕草子の影響—中世文学」『枕草子講座 4』昭和51)。また清輔の『袋草紙』は、「『書き集め』(『枕草子』跋文)に相応しい百科全書的性格、作法書的性格や、分類意識、類聚的要素、連想によるつながりなど、『枕草子』との共通点」があり、「書名について、作者みずから、『囊(袋)』という、作品の内容に深く関わりを持ち、かつモノ(調度品)を表す語を選んだ点は、共通点として看過できない」[注6]。

『初学抄』の内容だけでなく、これらの点からも、清輔が「物名」の配列を考えるに当たって、『枕草子』の初段や、さらには跋文を参照した可能性は大きいといえる。跋文は、「世の中にをかしきこと言、人のめでたしなど思ふべき名を、選び出でて、歌なども、木草鳥虫をも、言ひ出だしたらばこそ」とも解される(『枕草子解環』や高橋氏、前掲ハ参照)。

また、時間帯の語のある類書が歌書に限られるという根拠も、調査対象を広げることで成り立たなくなる。朝晩については、『古今六帖』第一帖「歳時部」中の「天」の「夕月夜、有明、夕闇」も看過できないが、漢詩にも見られるのである。

『千載佳句』上(金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集』増補版、昭和38)の波線部と初段との共通性については、『和漢朗詠集』巻上・秋「七夕、秋興、秋晩、八月十五日付月」と共に指摘されている(『日本古典文学大系』

補注一)。「四時部」「時節部」は共に「歳時部」に当たる。さらに「天象部」の下線部にも注目すべきだろう。

『千載佳句』上

四時部(立春 早春 春興 春曉 春夜 暮春 送春 首夏 夏興 夏夜 苦熱 避暑 納涼 晩夏  
立秋 早秋 秋興 秋夜 暮秋 初冬 冬興 冬至 冬夜  
歳暮)

時節部(元日 寒食 三月三日 七夕 八月十五夜 重陽)

天象部(月 風月 感月 雨 風雨 暮雨 雨夜 晴霽 雪 雪夜 春雪 晴雪 曉  
夜 閑夜)

地理部(山水 山中 泉 瀑布水 春水)

人事部(略)

また、『文鳳抄』(本間洋一氏校注『歌論歌学集成』平成12年)は、1200年前後に成立した、菅原為長(1158～1246)による詩文の語彙・摘句集であり、類似の書として南家藤原孝範(1158～1233)の『擲金抄』がある。『和歌初学抄』以後の成立であるが、時間帯への注目が和歌の世界だけのものではなかったことの証左にはなる。

『文鳳抄』卷一・卷二

天象部(天 日付夕陽 月 星 風 雨付雨後 雲 霞 霧 露 霜 雪付残雪 晴 日月 月露  
風露 風月 風雲 風雨 風霜 風雪 風煙 雲水 雲雨 雲霞 雲霧 霧雨 煙霞 煙  
雲 雨雪 霜月 霜雪 雪月 氷雪 氷霜)

歳時部(春 早春 雜春 暮春 三日 三月尽 早夏 雜夏 端午 避暑 晩夏 早秋 七夕 雜秋  
仲秋 暮秋 九日 九月尽 早冬 雜冬 仲冬 歳暮 千年 万年 遐年 曉 朝 昼  
夕 終日 夜 終夜 暁夕 朝暮 晝夜)

時間帯は中国の類書の「天象部」「歳時部」には無い。『修文殿御覧』にも無かったであろう(ちなみに『太平御覧』には無い)。これもまた、四季と共に、日本的な分類といえるのではないか。そのうち、朝晩だけでなく「昼」も取り上げているのは、管見に入った書の中では『枕草子』と『文鳳抄』だけである。『枕草子』では初段の一要素として四季の条に溶け込んでおり、「曙 つとめて 昼 夕暮れ(日入りはて) 夜」が列挙されているわけではないのだが、萌芽的な『千載佳句』(朝晩のみ、「天象部」にある)から、『綺語抄』『初学抄』や『文鳳抄』にいたる、日本的な「歳時部」の形成を促したものとして、位置づけることも可能ではないだろうか。

#### 4.3.天部と歳時部、天象と四季、そして和漢の融合

作品を何から始めるか、『枕草子』は散文であることによって、「天部」もしくは「歳時部」のどちらをも冒頭とすることが可能であった。四季で分類するか天を至上とするかのせめぎあいから解放され、両系統を融合することができたのである。

「天部」を冒頭とする点について、池田氏は「その最初に構想されたものは、おそらくこの日・月・星・雲などの天体現象であったであろう。これは天地玄黄とか日月星辰とかの、支那的な分類であって、辞書的な書物を執筆しようと思図した作者が、当然採用したものと考えて誤りないと思われる」(『全講枕草子』昭和31、前掲ホ～リ参照)といわれる。確かに、『枕草子』以前では、『千字文』を含め中国の類書や日本の漢詩文集が多い。中国の類書の中から、初段との対応が見られる書の一つの、最初の数巻の部立を引いておく。

『初学記』(中華書局版)

第一卷 天部上 (天 日 月 星 雲 風 雷)

第二卷 天部下 (雨 雪 霜 雹 露 霧 虹 蜺 霽 晴)

第三卷 歳時部上 (春 夏 秋 冬)

第四卷 歳時部下(元日 人日 正月十五日 月晦 寒食 三月三日 五月五日 伏日 七月七日  
七月十五日 九月九日 冬至 臘 歳除)

第五卷 地部上(総載地 総載山 泰山 衡山 華山 恒山 嵩山 終南山 石)

また『千字文』は、『宇津保』の前掲本文の直後に小君(仲忠異母弟)も誦んだと記されるが、同じ幼学書の一つ、順の弟子源為憲の『口遊』もまた天(日月星)から始まる。

『口遊』(幼学の会編『口遊注解』)

乾象門六曲(三光, 七曜, 七星, 十二月朔宿, 四月八日巳前大唐雨誦, 大唐雨誦)

時節門九曲(歳旦拜天地四方諸神芳誦, 庚申夜誦, 下食日沐浴誦, 浴時鐘誦時哥, 天一神方塞夜礼拝頌, 同神上下誦, 太白神方塞夜礼拝頌, 申政時刻)

「口遊の門名と先行資料部門対照表」(同書34~35頁)によると、「乾象」は『李嶠百廿詠』と共通するが『和名抄』『初学記』『芸文類聚』では「天部」で、「時節」はこれらでは「歳時」である。なお、冒頭の調査によると「李嶠百廿詠, 芸文類聚, 初学記, 事類賦」は分類用概念語彙の一致率から見ると、きわめて類縁性の高い典籍群と言える。『事類賦』も「天部」だが、「歳時部」全二巻が「春夏」と「秋冬」であるのが特徴的である。

しかし「天」から始まるのは、『枕草子』以前から漢詩文の書に限らない。例えば、上野氏ご指摘の『万葉集』の他、『源順集』の「あめつち」の歌「天地, 星空, 山河, 峰谷, 雲霧, 室苔, 人犬, 上末, 硫黄(ゆわ), 猿, 生ふせよ, 榎の枝を, 馴れ居て」もそうである。

『万葉集』巻七「雑歌」

詠天 詠月 詠雲 詠雨 詠山 詠岡 詠川 詠露 詠花 詠葉 詠蘿 詠草 詠鳥思故郷 詠井  
詠倭琴(以下略)

逆に、上野氏は「勅撰集をはじめ歌書は四季の歌を巻頭におく」とされているが、「春夏秋冬」が巻頭にあるのも、『古今集』や『古今六帖』など和歌関係とは限らないのである。かつて、「成立の源泉については(中略)漢文の類書や和名抄, 古今六帖や勅撰集もその一部で、初段『春は曙』は、前者の冒頭の天と後者の四季(春)とが融合しており、「紫の雲」の呈示と併せて象徴的な章段」(『枕草子入門——成立・諸本・作者・背景』『国文学』平成8.1)と述べたが、これは若干改めねばならない。

例えば、前項に掲げた『千載佳句』上の冒頭三巻は「四時部」「時節部」「天部」の順であった。「歳時部」から「四時」(『白氏六帖』にあり)を取り出し、「時節」(『口遊』参照)と別の部とし、「天象部」はこれのあとに回す。『千載佳句』の「四時」重視は、その下位分類に「春興」「夏興」だけでなく「秋興」「冬興」もあり、四つ揃えていることからわかる。平安中期以降の漢詩文が、例えば願文中に和歌的表現が見られるなど、和歌の世界に接近していることが指摘されている(渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』平成3)。和漢の融合は、何を巻頭にするかにおいても例外ではなかったのである。

前掲高橋氏も、巻頭か否かという問題意識や類書とは無関係であるものの、「歳時」の語が『礼記』にあること、日本の現存する部立では『類聚国史』が初見であろうことを述べ、『和名抄』巻一「歳時部第四」の例を平安中期の数少ない例の一つとして挙げた上で、

もつとも注目すべきなのは『古今和歌六帖』で、第一帖が「歳時部」の「春」「夏」「秋」「冬」と「天」部である。(中略)関連するところでは、『千載佳句』が「四時部」に立春や早春などを立て、『本朝麗藻』が四季部らしき上巻、『和漢朗詠集』が巻上に「春」「夏」「秋」「冬」の部を立てている。

と指摘されている。『枕草子』と同時代の『本朝麗藻』や『和漢朗詠集』といった漢詩を扱う書も、四季から始まっているのである。

なお氏は遡って、『古今集』の四季の部立が『新撰万葉集』序の「四時之歌」の部類意識によること、春夏秋冬の部類は『万葉集』巻八や巻十に「雑歌」「相聞」の下位分類としてあること、『句題和歌』や「平定文歌合」にも春夏秋冬の部があることも指摘されている。

以下もう少し、前後関係に限らず「天部」と「歳時部」との関係、「歳時部」の中の「春夏秋冬(四時・四季)」とその他との関係を具体的に見ておきたい。

『古今六帖』第一帖歳時部(『新編国歌大観』、漢字を当てた)

春(春立つ日 睦月 朔の日 残りの雪 子の日 若菜 白馬 仲の春 弥生 三日 春の果て)

夏(首の夏 衣替 卯月 卯の花 神祭 皁月 五日 菖蒲草 水無月 夏越の祓 夏の果て)

秋(秋立つ日 初秋 七夕 朝 葉月 十五夜 駒牽 長月 九日 秋の果て)

冬(初冬 神無月 霜月 神楽 師走 仏名 閏月 歳の暮)

天(天の原 照る日 春の月 夏の月 秋の月 冬の月 雑の月 三日月 夕月夜 有明 夕闇 星  
春の風 夏の風 秋の風 冬の風 山風 嵐 雑の風 雨 村雨 時雨 夕立 雲 露 霜 雪  
霰 氷 火 煙 塵 鳴神 稲妻 陽炎)

高橋氏は、この「春」「夏」「秋」「冬」に「節日」と暦月と年中行事(節会)と景物とが混在していること、「『歳時』の複合性は、第一において続く『天』に連続している」ことに注目されている。後者は、「天部」と「歳時部」の融合とも言い換えられるだろう。『古今六帖』は四季を重視しようとして、「天部」という規範的な分類概念と格闘し、折り合いをつけたともいえる。『千載佳句』は前後を入れ替えたものの、「天部」は独立してあった。この『古今六帖』よりも一層、自然をすべて四季で括った『古今集』寄りであるのが、「天」を持たない『和漢朗詠集』ということになるだろう。

『和漢朗詠集』卷上(『日本古典集成』)

春(立春 早春 春興 春夜 子日付若菜 三月三日 暮春 三月尽 閏三月 鶯 霞 雨 梅付紅  
梅 柳 花付落花 躑躅 藤 款冬)

夏(更衣 首夏 夏夜 端午 納涼、晩夏 花橘 蓮 郭公 蚩 蟬)

秋(立秋 早秋 七夕 秋興 秋晚 八月十五日付月 九日付菊 九月尽 女郎花 萩 蘭 槿 前  
栽 紅葉付落葉 雁付帰雁 虫 鹿 露 霧 擗衣)

冬(初冬 冬夜 歳暮 炉火 霜 氷付春氷 雪 霰 仏名)

ここまで見てきたことを、不十分ではあるが、仮にまとめると次のようになるうか。『和漢朗詠集』のみは成立順ではない場所に置いた。

書名	天	歳時	四季
『初学記』	首巻「天部上」	天の後に「歳時部」	「歳時部上」,「春夏秋冬」
『古今集』	分類ナシ	各季節の首尾に歳時や天,間に景物(高橋説)	首巻「春上」以下
『和漢朗詠』	巻上や巻下冒頭「風,雲,晴,暁」に分散	各季節の中の前半が歳時・後半が景物	上巻「春夏秋冬」
『古今六帖』	歳時中,四季の後「天」,その中に四季	首巻「歳時部」,景物が混在,天を含む	「歳時部」イコール「春夏秋冬」,次の「天」にも
『千載佳句』	歳時の後「天部」	「四時部」と「時節部」	首巻「四時部」
『枕草子』	初段「春は曙…」に天と歳時(四季と時間帯)の両方あり		
『綺語抄』	首巻「天象部」	天の後「時節部」	歳時部の巻頭に春夏秋冬
『文鳳抄』	首巻「天象部」	天の後「歳時部」	歳時部中,別掲せず

「天」の扱いにおいては、平安後期の歌学書は中国の類書回帰といえる。この中で、前項で述べた時間帯の歳時部への導入を含め、『枕草子』は重要な位置にあるといえるのではないか。単純に和漢の融合とはいえないが、

「天」と「四季」の融合、間にあるものの存在を意識した上で、中国的と日本的(古今集的)の両世界観の融合と述べておきたい。

## 5.おわりに

以上、主に諸類書的首巻と比較することで、『枕草子』初段の特徴を見てきた。日本の類書史を語る上で看過できない存在であること、『古今六帖』と共に個々の表現の出典として以外にも『千載佳句』との関係を考えて見る必要があることが再認識された。

取り上げた分野の類書の調査も不十分であり、各部の丁寧な分析が必要であるが、『枕草子』の性格を明らかにする為には、他にも、故実書や説話集(例えば『古今著聞集』)などの、他種の類書も視野に入れる必要がある。これらの書についても今後の課題としたい。

[注1]相田満氏「『標題』のさまざま—現代と脱領域的な視点から—」(『標題文芸(老)』平成 15 年3月)の「標題学の可能性」「部類標題のオントロジ」「部類標題語彙の継承性」より。

[注2]上野理氏「枕草子初段の構想と類書の構造」(『国文学研究』50集, 昭和48年6月)。

[注3]上野氏は「『春曙』考」(『文芸と批評』2巻8号, 昭和 43 年4月1)で『白氏文集』巻三十一「早春憶蘇州寄夢得」の「吳苑四時風景好 就中偏好是春天 霞光曙後殷於火 草色晴来嫩似煙」を出典として指摘し、『枕草子入門』(昭和 55 年)に継承されている。「春天」は本来「春」の意なので、「天」が「そら」と訓まれた例を掲げておくべきだろう。

[注4]日向一雅氏「枕草子の聖代観の方法——『陰陽の變理』の観念を媒介にして——」(『国語と国文学』70 巻9号, 平成5年9月)。太政大臣に関する「陰陽の變理」の語句を用いるべきか否かなど、若干検討の余地はあると思われる。

[注5]高橋亨氏「歳時と類聚——平安朝かな文芸の詩学にむけて——」(『国語と国文学』76 巻10号, 平成 11 年10月)。『古今六帖』を『宇津保物語』の出典としても重視されている。

[注6]拙稿「物語史の中の〈草子〉——〈草子〉の転機としての枕草子——」(『古代文学研究 第二次』10号, 平成 13 年10月)。